TUMSAT-OACIS Repository - Tokyo

University of Marine Science and Technology

(東京海洋大学)

漁船漁業経営の収益性改善に関する研究～宮城県気仙沼地区近海はえ縄漁業を分析対象として～

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2016-12-22
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 鶴, 専太郎
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://oacis.repo.nii.ac.jp/records/1339

［課程博士］（博士論文審査及び最終試験の結果要旨）

学生氏名：鶴　専太郎
博士論文題目：漁船漁業経営の収益性改善に関する研究
～宮城県気仙沼地区近海はえ縄漁業を分析対象として～

博士論文審査：

学生から提出された博士論文について、公開発表会が８月１日に行われ、審査委員と学生の間で分析期間の妥当性や結果の背景などについて質疑応答が繰り返しなされ、学生は質問に適切に答えたことなどから、博士論文としての質を十分に確保しているとの結論に至った。特に、気仙沼地区近海はえ縄漁業を対象とした事例研究の意義は高く評価された。

本研究は、日本漁船漁業に分析の焦点を当て、漁船漁業の経営力を左右する収益性を改善するための方策を解明することを目的として設定する。具体的には二つの課題を設定している。第１に日本漁船漁業の制度的特質と経営状況を明らかにすること、第２に漁船漁業の収益性を改善するための諸方策を検討することである。前者に関しては、既存の文献資料ならびに統計資料を基に売上利益率を指標として用いて分析し、後者に関しては、気仙沼近海まぐろはえ縄漁業を事例として取り上げて、その漁場生産性の評価、操業方法の選択、および漁場の選択という三つの項目から評価を行った。

まず、売上高利益率から日本漁船漁業の経営状況を検討してみた結果、1975 年から 2000 までは売上高利益率はプラスとマイナスの間に周期的な変動を見せていたが、2000 年以降はマイナスとなり、しかも利益率が低下傾向であり、漁業経営が悪化していることがわかった。このことは、50 トン層以上のまぐろはえ縄漁業においても確認できる。次に、気仙沼地区まぐろはえ縄漁業を分析対象事例として用いて、漁場生産性、操業方法選択および漁場選択の三つについて分析を行った。最初に季節別の漁場の漁獲物特性、漁獲努力量の偏り、利益の高低を特定し、収益性の高い操業方法について検討を行った結果、冬季から春季にかけて近海域でメカジキとヨシキリザメが併せて漁獲される漁場では黒字が大きく、夏季に形成されるメカジキかヨシキリザメの何れかが漁獲される漁場は経済性が低いことがわかった。以上の結果を受けて、操業方法選択の可能性について検証を行った結果、採算性の観点では夏季の「深縄」操業の導入による採算性の向上は難しいことがわかった。最後に収益性改善の基本的な取り組みとして、収益性の高い漁場選択の精度を上げるための分析を行った。黒字漁場の絞り込みについては、段階毎に黒字の出現確率が上がるにつれて選択可能な黒字漁場が限定され、同様に赤字確率の高い漁場の絞り込みも行われた。これらの方法が実用可能であるならば、高確率で赤字になる漁場を避け、黒字となる可能性の高い漁場を選択することで漁船漁業の赤字操業回避効果が期待できることがわかった。

これらの成果は、日本漁業の収益性向上策を漁場選択の意思決定という視点からのはじめて実証的・定量的研究であり、今後より多くの漁業種類別（例えば漁船漁業と養殖業別）の研究や海況変化・燃油や市場の価格の変化を織り込んだより精度の高い解析という課題は残されているものの、今後水産経済学分野の発展にも貢献できうる研究といえる。

以上の内容から、学生から提出された博士論文は、国内外の研究の水準に照らし、水産経済分野における学術的意義、新規性、独創性及び応用的価値を有しており、博士の学位に値することを審査委員一同確認した。

最終試験の結果要旨：

最終試験は８月１日に行われた。審査委員一同出席の下、学生に対して、博士論文の内容について最終確認のための質疑応答を行い、その内容は十分であった。また、合同セミナーの単位を修得したことと、専門知識については公開発表会当日の質疑応答時や予備審査時でのディスカッションを含め十分であると審査委員一同確認した。以下の学術論文（鶴専太郎・宮田勉・上野康弘・溝口弘泰・岡谷喜良・小河道夫「気仙沼地区近海まぐろはえ縄船の利益向上に資する漁場選択」、『国際漁業研究』第 12 巻、pp. 19-34、2014）が刊行されており、学位論文審査要項第７条の適用条件を満たしていると判断した。また、英文要旨を確認するなど語学力についても考査し、英語の学力については問題ないと判断した。また、講演発表は国内学会２回行っていることを確認した。

以上から、学生について博士論文審査、最終試験とも合格と判定した。